

サイドバイサイドの作り方

昨日久しぶりに若葉町の **WHARF** に行った。たまたま佐藤信¹さんがいらっしやっただけで、少しお話をした。広いスペースの中央に横1列に細長くテーブルをつないで、その片側だけに椅子が並んでいた。なるほど、**SIDE BY SIDE** か。

去年は「黄金町バザール」のために長いテーマ文を書いたが、それにそって中身をつくるというような状況にはならなかった。ただ、期間限定で黄金町の上にテーマをかぶせて、いつもと違うものを見せようとしたわけでもなく、結果的に現在の状況下の黄金町の姿をそのまま紹介したような形になり、それはそれでよかったのではないかと思う。

最近の私はテーマを考える時にどうもアートだとかコミュニティだとか、そんなことばかり言っていたような気がして「黄金町バザール 2021」はそこから離れてみようと思っていた。そんなときに **WHARF** を訪問して、何も考えずに **SIDE BY SIDE** か、と言葉だけ思い出した。

もちろんこのタイトルの有名な歌があって、私の世代だと江利チエミだが、もともと暗い時代に作られた楽曲で、こんな暗い時代だけど、希望を持って明るく一緒に生きていこうよ、というようなことらしい。

私はパソコンで **SIDE BY SIDE** の意味の範囲や、例文を調べてみた。調べてみると、ただ並んでいるだけ、というような無機質なレベルの意味合いと、共同する、とか一緒にやるとか、能動的な意味につながる場合と、両面で使われているようだった。

今回はできれば無機質なレベルから始めたい。黄金町に来たことがある人はよくご存知だが、地域の歴史的事情によってこの街は無数の扉と窓が並んでいる。その扉や窓は開くところもあれば、閉じたままのところもある。アーティストが使っているところは、外から見てもなんとなく見当がつく。

今考えているのは、窓、扉、その中、外を問わず、この地域の景観に即した展示である。通りを歩きながら、なんとなく変化が連続的に感じられるような、場面を作りたい。作品の大小、連続的な展示、分散させる方法、いろいろやりようはあるかと思うが、全体がこのような見え方になることをめざしてみる。ということで、今回は作品の数が多い方がよさそうなので、できるだけ多くのアーティストと一緒につくっていききたい。ある作品を見ていたら他の作品も目に入る。作品ではないものも目に入るというような場面が展開したらいいのではないか

と思っている。

私はもうひとつついでに横並びの話をしたい。2013年ごろから私は横井小楠²について勉強し始めた。暗殺によって横井小楠という機械は停止する。しかしその停止したところから再び始めようとする人たちがいて、彼らは日本の明治以降の動きをまるでパラレルワールドのように今あるものとは何か別のものとして再構築しようとしていた。アジア的な近代とは何だったのか。そしてそれがありえたかもしれない別の姿を描いてきた人たちを探し出すことが、アジアの近代美術の流れを捉え直す上でも重要ではないか。私はまだ、このような本文のない序文のようなものしか書けないが、今後の実践の中で、この本文にあたるものを探し、そして一緒に仕事をしてくださる人たちとともにこのことについて考えていきたい。

アジアはそれぞれの国がそれぞれのありえた未来を指し示す思想を持っていた。アジアの若いアーティストや研究者たちが今目の前にある問題に立ち向かおうとする時、それら過去の思想は過去であることをやめて、われわれの前にもう一度よみがえってくる。

そして私たちはお互いにお互いを参照し、自分自身を更新する機会としてそれを捉える。

黄金町をあまり知らないというアーティストのみなさんは、ホームページ上の最近の街の写真等を参照されたい。

また、可能であれば、今年も研究者やインターンにも声をかけていきたい。

いずれまたお会いできる日まで、お互いがんばりましょう。

(2021年3月 山野真悟)

¹ 劇作家、演出家。1943年東京生まれ。1966年、アンダーグラウンド・シアター自由劇場を結成。68年、演劇センター68（現・劇団黒テント）に参加。幅広い分野の舞台演出のほか、演劇と社会の境界をめぐる発言と実践を続ける。公共劇場の開設・運営にも長年携わり、世田谷パブリックシアター初代劇場監督（1997～2002年）、座・高円寺（杉並区立杉並芸術会館）初代芸術監督（2009年～）などを歴任。後進の育成に携わり、近年は中国独立系演劇人との継続的な共同作業をはじめ、アジア演劇のオルタナティブ・ネットワーク形成に力を注いでいる。2017年6月、横浜市中区若葉町にアートセンター「若葉町ウォーフ」を開設。日本を含むアジアの若手演劇人の交流と創作拠点としての同センターの活動が注目を集めている。

² 幕末の熊本藩士、儒学者、政治家、思想家。1843年（天保14）頃、実践的朱子学「実学」を提唱し、私塾を開く。1858年（安政5）に福井藩主松平慶永（春嶽）に政治顧問として招聘され、福井藩にて藩政改

革を指導し『国是三論』にまとめた。1862年（文久2）幕府政事総裁職に就任した松平春嶽をたすけ、幕政に参画。幕府改革や公武合体運動を推進し、新たな国家のあり方として「公」の政治を確立することを目指した。明治新政府では参与に就任したが、1869年（明治2）京都にて暗殺された。